

「グローバリズム下のナショナリズム」

2016年03月23日

『週刊金曜日』の編集委員の佐高信氏が3月18日号で、「辛淑玉の本質を射抜く国家論」と題して、『マスコミ市民』3月号に掲載された辛氏の連載エッセー「山椒のひとつぶ」から引用している。少し長いが、在日の方々の怒りを著しているので、転載したい。
「日本最大の暴力団といえば、もちろん日本政府だろう。みかじめ料の取り方は半端じゃない。なにしろ日本は事実上世界の重税国家なのだ。稼いでも、ものを買っても、タバコを吸っても、酒を飲んでも、死んでも、金をくすねていく。いまでは、老後のためにせっせと積み立ててきた『年金』までが、『株』という博打につき込まれて大損している。とりわけ選挙権のない私など、信任したわけでもない輩から奪い取られ、支払いが遅れれば追徴金まで取られるという理不尽。ちゃんとショバ代払っているのに、カルト化した異常者たちから『殺せ！ 殺せ！ チョーセンジン！』と叫ばれ脅迫されてもこの暴力団は守ってくれない。抗議などしたらこっちが捕まるのだから、まさに無法地帯、人権番外地の状態だ。お金をむしられるだけでは済まない。いまや、命までとられるのだ。」

グローバリズムという言葉が流行り始めてから久しい。グローバリズムは国家の利益を超えて、全世界の安全と利益を優先させるという考えではなかったか。グローバリズムの下で確かに人、物、金は世界を流通するようになった。しかし現実には、財力と情報収集力と強力な軍備を持つ国々が世界の資産を収奪する機構になっただけである。

今日、本来のグローバリズムの意に反するナショナリズム（国家主義）が色濃くなっている。米国の大統領選で、共和党はトランプ旋風が吹き荒れている。トランプ氏は民族差別を臆面もなく、叫び続けている。既成の政治に不信と怒りを持つ米国民の表れだと解説されているが、あまりの暴言に啞然とする。ヨーロッパにおいても、中近東、アフリカからの難民が押し寄せ、排外主義を主張する勢力が支持されるようになった。寛容政策を訴えていたドイツのメルケル首相も窮地に立たされているようだ。日本では、安倍首相が憲法改定を明言し始めた。自民党の「憲法改正草案」を読むと、主人公は国民でなく国であると、立憲主義をひっくり返したような草案である。恐ろしいほどの国家主義である。

グローバリズムと言われる下で、真逆なナショナリズムが台頭している矛盾をどのように理解し、受け止めたらいいいのか。少数民族、社会的弱者は本当に生きづらく、命の保障をなくしてしまう。辛氏の怒りに同感する。

同じ号の『週刊金曜日』の編集後記の「金曜日から」に、神原由美氏が『朝鮮と日本を生きる』を著した金時鐘氏のことを書いている。金青年は日本に逃れ、着る物に事欠く生活をしていた時、バス停で女学生から「お父さんのお古です。使ってください」とカッターシャツを差し出された。恥ずかしさのあまり、顔をそむけてバスに乗った。以来、そのバス停は避け、二度と会うことはなかったが、なぜ素直に受け取らなかったかと、今でも心がうずいてくる。そして、「貴女のおかげでとかくけばだちがちな日本への思いが、折りたたまれた洗いざらしのシャツにくるまれてほんのり和んでもくる。そしてそのつど自分に言い聞かす。日本は絶対、心根のやさしい人々の国である」と結んでいるという。

私たち小さな一市民は世界に向かって、何かができる訳ではない。しかし、政治を変えようと言い続けることはできる。弱者を排除する人々に抗議し、排除されている人々に心を寄せることはできる。市民が国の主役であることを訴え、出会う人、また見えない人々とも時代を共有していることをしっかり認識したいと思っている。